魔法少女リリカルなのは　阿呆と泥棒猫

サンカーン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　阿呆と泥棒猫

【Ｎコード】
Ｎ２１０１ＢＡ

【作者名】
サンカーン

【あらすじ】
次元泥棒マキと海鳴市の阿呆が出会った
そしてマキの探し物を探す事になった琢磨だが
そこで色々な難関に出会う
みたいな感じで
読みにくいと思いますがよろしくお願いします

怪我した猫（前書き）

主人公に一人称が定まらないのは仕様です

怪我した猫

俺は今学校の通学路を自転車で進んでいた

お金を貯めてようやく念願の自転車を買ったぞ！当分バス通学は無理でーす

『おい！誰かいねぇのか！助けろ！俺を！』

何だ？宇宙からの交信か？

いつもなら無視するんだが、気分が最高に良い俺様ちゃんは声（電波）の所に向かってみた

「僕を呼んだのは誰かなー？出できなー」

んー此処だと俺の小宇宙（コスモ）が言ってんだけどなー

ありり？よく見ると地面に何か横たわってんなー猫か？

「おーい、ボロ猫ちゃんよーもしかして君が僕ちゃんの事呼んだのかにゃ？って、んな訳ねぇーよな」

「いや、其の通りだぜ」

！！…独り言を言ったつもりが答えが返ってきたよー……薄汚い猫からよー

「おいおい、何時から猫が喋れる様になったんだよー？この世界はよー、ていうか君人間語喋れる？

ニャーンニャンニャー！」

「馬鹿にしてんのか？まあ？この世界？の猫は喋れないだろうな」

「何か気になる言い方だなおい」
「お前に言っても信じないだろうがな、というかさっさと助けろ、この俺を」

何て態度の悪い奴だ、こちとら学校を遅れる覚悟で来てやったのによー

「仕方ねぇーなー、この歳して持っている俺様の可愛い携帯ちゃんで救急車呼んでやるよーこの場合動物病院かー？、動物病院の番号知らねぇから、取り敢えず普通のホスピタルでー……」

俺は赤色の携帯をポケットから取り出し三つの番号を打った

「ハローハロー、聞こえてますかー？……あ、すいませんちょっと怪我してる人？を見つけて、救急車呼んでもらえないでしょうか？場所は…です、え？状態ですか取り敢えず何か猫って感じですけど……いや違うんです猫じゃないんです、喋る猫の様な生物なんです、はい……いや、ふざけてないです、真剣です……いや別に僕、頭打ってないです、どうしてそんな事聞くんですか？……ふざけないでください
いいから速く来てください、ハリー！ハリー！それでは」

そう締めくくり俺は通話を切った、そして猫の方に振り返り

「やばい、このままだと、お前では無く俺が救急車に連れてかれる、黄色い」
「当たり前だろが！」
「とりあえずー逃げようなー」

俺は片手で猫の首を掴むと自転車の方に走った

「この持ち方やめろ！悪さした猫か！」
「うるせーよー今、自転車に乗るからよー！」
俺はこのボロを自転車のカゴに突っ込んだ
「ふぎゃ！」
「行くぜ……ギア…1…」
自転車のな

俺は自転車を駐輪所に止めるとマンションを駆け上がった
家で風呂を浴び、サッパリした所で猫に聞いてみるかー
「たっくよー手前のせいで僕ちゃん学校サボっちまったじゃねえーか、つかお前腹減ってただけかよー」
「けっ！別にいいだろがあんなかったるい所行かなくてもよ」
同意見だが
「ていうかさ、お前何物で、何で喋れるのか教えてくんない？」
「いいぜ、管理外の世界の野郎にも分かる様に教えてやるよ」

「へー、そげなことホンマにあんのかー」
何か世界は幾つもあって、当然それを管理する奴もいて、魔法と言うのもあって
自分は実は人間とか
「あれまー、何か色々聞き過ぎて頭痛くなってきたぞー、何言って

るのかわかんねー♪」
「あ、倒れた」
俺の意識がシャットダウンした
「で？何でお前はこの世界に来んだよ？」
「探し物だよ」
「探し物ー？何か怪しいなー」
そこで猫がニヤリと笑うと
「正確には俺が盗んだ物だがな」
「おいおい、泥棒かよー勘弁してくれ」
「け！管理局の連中と同じ事してるだけだ、俺は売ってるがな」
違う気がするが……
そして察しの良い俺様ちゃんはこいつが何を言いたいのか分かってきた
「んで？そこまで自分の事を話ったて事は……」
「俺に協力しろ！」
「ですよねぇー」
協力ねー、ん？協力出来るということは
「もしかして僕様ちゃんにも魔法が使えんのか？」
「ああ、才能があるわけじゃないが」
「まじかよ」
その……私様にもリンカーンゴアックがあんのか

そうだなぁー

「7！」
「あん？」
分かんないの？
「金を１０とするなら、お前は3で、俺が7な」
猫はポカンとした表情をした後、怒り狂った
「はぁ！ふっざけんな！却下だ！却下！」
「でもー、お前は俺に頼んでるって事は今、魔法つかえねぇーんだろー？」
「ぐっ！……だけど7は多い！せめて４だ！」
「嫌だねぇー４は死みたいで縁起悪いしよー」
「じゃあ、5！5でどうだ！」
「いいぜ、それで、タダ働きではねえーならな」
「畜生！運悪いぜ！」

あーそういえば

「俺の名前は琢磨つーんだが、お前の名前何て言うの？ミケ？」
「噛みちぎるぞ……マキだよ」
「覚えたぜーマッキー」
「マキだ！」
「分かったぜー、牧田」
「だれだよ、それ！」

猫魔法使いマキと海鳴市の恥とのコンビ結成の瞬間だった

街案内

「んで？探し物って、どんな探し物何だよー」
肝心の事を聞いていなかった俺様くんはマキに質問してみた

「ロストロギアの話はしたよな」
「ああ、したなー」
「それを盗んだんだが、……途中で暴走してな、止めようと思ったら、ロストロギアと一緒にここまで飛んで来ちまった、それでリンカーコアが傷ついて魔法を使うのは不安定だし、ロストロギアはカラスに奪われちまった…そこにお前が来たんだ」

ロストロギア

過去に何らかの要因で消失した世界、ないしは滅んだ古代文明で造られた遺産の総称。多くは現存技術では到達出来ていない超高度な技術で造られた物で、使い方次第では世界はおろか全次元を崩壊させかねない程危険な物

「つーかささっと見つけないとやばくね？」
「いや……まだ、大丈夫なはずだ」
「不安になんなー」

俺以外の奴が死んでも特に困らんが…海鳴市だけ奇跡的に残らないかのー？

それから魔法の使い方やデバイスの使い方などをレクチャーしてもらった

PiPiPiPi！

「んにゃ？電話か？」

番号を見ると学校からだった

「そういやサボっちゃったなー……まあ、いいか……良し！さっそく探しに行くぞ」

「やる気だな」

「ついでに道案内だなー」

マンションを降り、マキをカゴに突っ込む

「フミャ！」

「行くぜー！全速前進！」

※

「ここは古本屋だ、しかし少年漫画と少量の小説しかなくて、僕ちんは余りいかねぇー」

「俺は本は嫌いだ」

「ふーん、もったいねぇー、おっ！海人ゴンズイが売ってる！ラッキー！」

「……本当に品揃え悪いのか？」

※

「ここは、公園だなー奥様方やそのアホガキ共がいる」

「お前も変わりないだろ……」

「ん？何か、奥様やガキに見られてんな」
「この時間にお前がいるのをおかしく思ってんだろ」
「何だ！手前ら！言いたい事あるなら言えや！見てんじゃねー！」
「大人げない！」
「んだとー！俺は小学3年生だぞ！」

※

「ここは海だなー」
「ほー、綺麗だな」
「特に説明する事ねぇーな」
「…そうかい」

※

「ここは翠屋って言う美味しいお菓子を売ってる場所だな」
「へー、買ってけよ」
「だけど、ここには魔王がいるんだ」
「ラストダンジョン！？」

「あ！琢磨君！」
「んあー？高町さんじゃあないですかー？」
「学校に来てなかったから皆心配してたよ」
「時間に縛られんのは好きじゃねぇー」
「……それだと何処にも就職出来ないよ」
「実は俺はいい事してたんだよー」
「露骨に話逸したね、……いい事？」
「ほい、この猫助けたんだー」
「これって……イリオモテヤマネコだよ！」
「え？不味かった？」

「絶滅危惧種だよ！西表にしか居ないのに……密猟してきたの？」
「殴る蹴るの暴行を加えるぞ」

※

「まあ、ざっとこんなもんだー」
「大体把握したよ」

ふぅーやっと家に帰れる

「ただいまー」
「琢磨ー！学校サボっただろー！」

家の玄関に着くと、扉から同居人のデブが出てきた

「デーブ、お前は何を言ってるんだ俺は学校へ行ったぞ」
嘘だが
「デーブって言うな、嘘つかないでよ、僕と同じクラスなんだから分かるよ」
「そんな事より飯だ飯」
「飯！！」
「あっ、馬鹿」
「作ったけど、って猫が喋ってる！」

結局この後デーブにに事情を説明するやら何らで、いざ食べようと思った時にはすっかり飯が冷たくなっていた

マキ……許すまじ

空、飛ぶ

「だからよー、デーブも協力してくれよー」

ご飯を食べて歯を磨いた後、俺はこうしてデーブにお願いしている

「別にいいけど……あ！もしかして僕にも魔法使えるとか！」

協力を得られたが、期待に胸を膨らませているデーブに期待は見事に裏切った

「無理だな、リンカーコアさえ無い」

「ああ……そうですか……」

ブランド物買ったら偽物だった並の落ち込みようだ

「でも！……一応，探してみるよ、どんな形なの？」

「赤い宝石みたいな形だ」

「宝石ねーん」

と、思ったらすぐに復活した、こういう所好きだぜ

ふと、何かに気づいたようにマキが疑問を口にした

「そういえば……もう9時だが、お前らの親は帰って来ないのか？」

そこで俺は何かに耐えるな顔をした

そしていつもの巫山戯た口調ではなく、事情を説明した

「まあ……生きてれば…この時間に帰ってくるだろうな……」

マキは気まずそうに顔を逸した

「その……何か、ごめんな……」

「いや、いいさ」

「……亡くなったんだ」

「いや、生きてるよ？」

「生きてんのかよ！今のかなり気まずかったぞ！」

やーい、だーまされーた

「さてー、そろそろ風呂入ろう」

俺はマキの首根っこを掴むとデーブと一緒に風呂場に向かった

※

「今日さー怪人ゴンズイの初版買ったぜー」

「えー、また無駄遣いしたのか」

「いやーお金はやっぱある時に使わないとねー」

「はぁ～」

頭を抱えてどうしたんだ？

「そんな事よりさー、マキー後で空飛びに行こうぜ～」
「そうだな、慣れた方が良い」
「あー！良いなー」

そんな恨めしそうな目で見られてもなー

「分かったよ～今度お前の腕掴んで飛んでやるよ～」
「本当！」
「ホントさ、ホント」
「楽しみだなぁー」

※

場所は変わり此処は昼来た公園
僕様ちゃんはもうｓｅｔｕｐした状態だ
デバイスも盗んだ物らしい
これは人格が無いが人格がある奴もあるらしい、こえー

「しかし変な格好だな」
「えーナウいだろ？」

今の俺の格好は学ラン、そして頭にトナカイの頭の骨を被っている
学ランの下に何も来てないのがポイントだ

そしてデバイスの形が良くわからん
見た目には片方の目が青色になっただけなんだが

マキが言うには人体から魔力を放出できるらしい

「良し！早速飛んで見ろ」

「ＯＫ」

こんな感じかー？

「？うっ、おっ。おっ」

俺の体が浮かんだ

そして１０分後俺は空を縦横無尽に動き回っていた

「ふはっ、ふはははは！！ナにコレ超楽しい！」

と、あかん子の様に笑うぐらい楽しい

「あはははははは！！素晴らしいじゃあねえか！見ろ！人がゴミの様だ！」

「おいおい、テンション高すぎだろ」

「楽しい！楽しい！素晴らしい！ｈｅｒｒｌｉｃｈ！」

「落ち着け！」

この後３０分くらいこうしていた

無印始まり始まる

「学校行ってくるからいい子にしてろよー」
「行ってきまーす！」

マキを家に残したままデーブと学校へ向かうこの俺様ちゃんこと針山　琢磨には秘密がある
何と！魔法少年なのらー！……何を言っているのか分からねえだろうが、僕ちゃんもわかんねえ

「あーあ、昨日学校サボったから怒られんなー」

昨日休んだからなー

「琢磨が悪いんだから甘んじて受けなよ」
「そうなんだけどなーあの先生怒ると怖いぞ……」

僕様ちゃんが通っている学校は私立聖祥大附属小学校といういかにもいい子ちゃんが通いそうな学校だ。
偶に子供っぽくない言動をする奴がいてちと怖いぞ……

※

さて、教室に着いたし恒例のあれやるかー

「俺様ちゃん、降臨！」

教室に居た奴らから、お前かって言う視線を貰いながら進み席に座る

ついでに俺の隣りの席の奴に声を掛ける

「よ！零一君！」

「……」

おいおい、無視かよーいつも居るあの三人衆には笑顔で話しかけんのにー

まあ、逆に笑顔で話かけられたらホモ…？て思うけど

さて、先生が来るまで寝るか

「ｚｚｚｚｚｚｚ」

「……ちっ！」

※

時は飛んで昼休み、屋上で俺とデーブが弁当の中身を箸でつっついている

カリフラワーうめぇー

「先生、あんな怒るとは……」

「昨日休んだあげく、授業中ずっと寝てればそうなるよ」

デーブはこう言うが…授業で将来の事の話の時、名指しで就職出来ないかもねーって言われた時は背筋が凍ったぞ

「将来かー、琢磨はどうするの？」

「俺かー俺は……そうだな取り敢えずこのタコさんウィンナーを食べるとするよ」

「いや、そうじゃなくて」
「未来の事ばっかり考えても仕方ないだろー、人生ってのは今を楽しんでこそだ」
俺様、今カッコイイ
「全然格好良く無いよ、どんな仕事やりたいとかないの？」
「ふふっ、俺はＢＩＧな男じゃけん、適当に下々の物に支持だして、後はのんびりお茶飲んでる仕事が良い」
「はぁ～」

どうした、そんなため息付いて？幸せが逃げるぞ？

「そういえば、僕ちん、今日夢を見たぞ」

俺は苦手なゴーヤをちょびちょび食べながら言う

「へー、どんな？」
「えらくリアルな夢だった……俺達と同じぐらいの歳の野郎が変な化け物に襲われる夢…ははっ、正夢かもな」
「……正夢だったら笑えないよ」

仲良く談笑していると

「この、バカチン！」

と言う声が聞こえた

「あれはー、アリサ・バニングスと…」
「高町なのはと月村すずかだね…後、桜井零一」
そうそう、そんな名前だったねー、にしても

「お前女の名前から先に言うたぁ相当に女好きだな？」
「ち、違うよ！あの三人の方が頭に浮かぶのが早いんだ」
「……原作ていう奴かよー？」
「…そうだよ」

俺は一回死んだ…正確に言うなら僕たちが二回死んだ
そして生き返った……

「しかし、にわかには信じられねぇぞー？アニメの世界なんてよー」
「同じような世界だよ……少なくとも僕が見た限りあの４人組は３人組だった……そしてマキは登場してなかった
マキは転生者の匂いがしなかったけどあの零一にはする……」
「便利な鼻だなー」
「何となく分かるようになったんだ……原作を知る僕からの忠告だけど、出来るだけ原作に介入しない方がいい、バタフライ効果でこの辺りの次元が消えるかも知れないんだ……マキには協力しない方が良い、協力したらまず間違いなく高町なのはと対決する……」
「……安心しろや、上手くやる」
「何で琢磨はそこまでマキに協力するんだ？死ぬかも知れんないんだぞ」

協力する理由？そんなの決まってんだろ

「金」

デーブは少し驚いた顔をした後

「最低だな」

と俺様を罵った

「俺の為なら人が何人死のうが知ったことではねぇ……まあ、お前は守ってやるよー」

「なら、協力しないで欲しいだけどなぁ、大体次元世界が崩壊したらどうやって助けんだよ？」

「未来の事ばっか考えても仕方無いだろうが、今は今しか無いんだぜ？」

「話を逸らすな」

横からゴーヤを奪われ無理やり口に詰め込まれたあばあっばばｂｓばさｂ

※

学校が終わり帰り道をデーブと一緒に自転車に乗って進んでいく、二人乗りだ

『助けて』

デジャブ

「ん？何か聞こえたかにゃ？」

「いいや？何にも」

「助けてって聞こえたぜー」

「！……原作だ…無印が始まった」

「……マジ？」

何か起こりそうな気がするなー

無印始まり始まる（後書き）

おまけ

「帰ってきましたよー」
「おお、お帰り……どうでもいいけど、お前さ」
「ん、何？」
「凄い小物臭がするな」
「……」

カラス（前書き）

異様に長い話
戦闘描写出来たかな？
若干中２病ぽい

カラス

夜、布団に入っているとマキが何かに気づいた様で俺の体を揺すってきた

「おい、カラスがいる」
「んあー？こんな時間にか？」
カラスがいる……だからどうしたんだ？

窓を指すので見てみると外の電柱に2メートル程の大きなカラスが…って
でっか！カラスでっか！

「おいおい、何あれ僕ちゃんの目が腐って落ちちゃたのかにゃー」
「お前の目は正常だ、あれが、？俺の？物を盗んだ奴だ」
「カラスってあれカラスじゃねぇだろリドリーだろ」

俺はサムスじゃあないが

「こっちの世界のカラスじゃない、ていうかあれは俺と同じ変身魔法だ」
「カラスって言うから勘違いしたじゃねぇか、ていうか変身魔法って何？」
「んなことは良いからさっさと行くぞ」
「わかったよー…セットアップ！」

ちゃんと窓を開けベランダから？飛んだ？

「やっぱ、気持ちいいなぁー、なあ、あんたもそう思うだろ、カラスちゃん♪」
「いきなり何言ってんだ、おめえ、つか誰だよ」
ごもっともです
肩に乗っていたマキが身を乗りだし叫んだ
「カラス！手前よくも裏切ったな！」
裏切った……仲間だったのか
カラスは少し驚いた表情をしていた
「何だよ、マキか……そこで其処の変態ルックの僕ちゃんは現地協力者ってか？管理局が嫌いの癖に随分奴らと同じ様なやり方だな」
馬鹿にするように言うカラス…ていうか変態ルックって何だよ、センスが分かんない野郎だな
「何故裏切ったって？それは元々裏切るつもりで仲間になったんだよ、お前が盗んだ所を俺が独り占めしようと思ってな……ただ、予想外だったのはお前が予想以上にズル賢かった事だな、おかげで全然チャンスを掴めなかった、今回の盗みの事故の時のやっとチャンスが来たんだ、それで裏切ったんだ」
マキは偉そうに語るあいつに小馬鹿にしたような表情をする（猫だからよく分からんが）
「だけど、お前に転移魔法は使えない、この管理外世界ではロストロギアは売れない、つまり転移魔法が使える俺に協力するしか無い

んだよ、今のうちに謝った方が良いんじゃないか？」
お、おう、そうだな、転移魔法が何か知らんけど頭いいなぁ
「知ってるよ……だから、無理やりにでも、協力を得るしか……無いな！！」
うぉ！いきなり突っ込んで来やがった！
俺は上へ避けるとカラスの方に構えを取った
「ほう、何か武術でも使えるのか？だけど関係ないな！」
使えません、ただ何となく構えをしているだけです
カラスが口を開けるそしてクチバシの先に何か氷の様な物が…っ！
それは段々と巨大化していく
「げっ！」
マキが焦っている、そんなにやばいのか？
「やばい！避けろ！お前はそんなに防御強くないんだ！」
「分かってるよ！」
限界までカラスに離れようと後ろに向かう
「おほぉい（遅い）」
巨大な氷の塊ができ、それが分散し四方八方に勢いよく飛んでくる！
「ペットショップかっつーの！」
「魔法使え！俺が教えた奴！」

「おう！」
何だか分かんないが分かったぜ！
ていうか魔法？習ったの一個しか無いぞ？あれで守れんのか？
「自分を囲むんだよ！」
え？あ！そうか！

※

ズドドッ！

手応えあり……

「ふん、弱いな」

少しやりすぎたか？まあ非殺傷設定だから死んではないだろう
煙塵が消えマキとガキが居た場所には

さっきと同じ様にマキとガキがいた
何故だ？手応えはあったはず

「何をした？……！」

よく見えないがガキの前にはいくつのも青い薄い線みたいな物が壁の様にガキを守っている
そしてその青い線はガキの指の動きに合わせて動いてる様だ、ガキが中指を動かすと壁が解けただの糸になった

「合点がいった……お前の何時もの見えない攻撃はこの魔力の糸を鞭の様に使っていたんだな……」
「その通り、驚いたか？」
「あのー僕ちんがやったのに何でそんな偉そうなんですか？「黙ってろ」ハイ……」
「何だ、えらい素直だな……ていうかさっきからテンション低いな」
「眠いんだよー」
「話をしている所悪いが……死ね」

今度は威力を強めにして
口に魔力を貯め一気に……はき出す！

「うぉ！」
「避けろ！これは守っても無駄だ！」

マキが注意するが、このガキは注意を無視して後ろではなく俺の方に突っ込んできた
そして自分に向かってくる氷の破片を糸で弾き、当たらない様にしながら俺だけを見て

「随分、威勢の良い僕ちゃんじゃないか……だが！」
「ガッ！」

弾ききれなかった破片がガキの足に当たった

「管理外世界のガキにしちゃあやる方だった…」

再び口に魔力を貯める

「ほほってへいぞ（誇っていいぞ）」

ガキは俯いている、さすがに絶望したか？だが…止めるつもりはな

「……はっ…ははは……ふひは…ぐひゃはははは…」

何だ？

「ぐぅわひはははははは！！！」

「ほうひた？はへほんなにおかひい？ひはふうはっは　（どうした？何故そんなに可笑しい？気が狂ったか？）」

この状況でこのガキは笑っている、その事に少し俺は寒気を感じた

「いや！いや！ちげぇよ！何だよこれ！凄い楽しいじゃないか！空飛ぶのも楽しいし、戦うのも楽しい！痛い！凄い痛い！でも楽しい！マキに出会って楽しい事続きだ、お前らのいざこざに巻き込んでくれて……ありがとう！！」

こいつ、戦闘狂（バトルジャンキー）か！？だが無鉄砲に突っ込んでくるとやはり気が狂ったのかと思うね！

「ほうか、ひね（そうか死ね）」

「目から…ビーーーム！！」

「「！！」」

言った通りガキの目から青いビームが出た

そしてそのまま一直線に進み氷の塊を突き破り俺の口にビームが直撃した

「グガッ！」

熱い！そして痛い！たまらず魔法をキャンセルしてしまった

「ナイス！…でも何であんな技使えるんだ？」

「目の色が変わったから何となく試したのさ！」

あががっ！クソ！

「逃げた！逃すな！」

「勿論だ！」

はっ！俺の速さについてこれる訳ないだろうが！

その時、ふと足に違和感を感じた

足を見てみると特に違和感はない…いや！ある！

「なんで……何で！……俺の足に糸が巻きついてんだぁぁああ！」

「よっこいしょ！！」

凄まじい勢いで引っ張られ思わず目をつぶる

そして次に目を開けた時には……ガキの愉悦に浮かんだ表情があった

※

「捕まえたぁ♪」

「ひっ！」

びっくりした？
カラスの首を掴み思いっきり締め上げる
「ぐぅ、ぎっ！が！」
「苦しいか？苦しいだろ、苦しいのが嫌だったらさっさとロストロギアを渡すんだなぁ！」
締め上げる、締め上げる、締める、締める
「止めろ、死んじまう……さて、カラス死にたくないなら、ロストロギアの場所を言いな」
言いやすい様に少し緩める
「げほっ！げほっ！……はあ…はあ……ロストロギアは……売った……」
「嘘つくんじゃねぇ！管理外世界にあれを買ってくれる奴何か質屋だけだろうが」
「嘘じゃない……お前と別れた後、妙な魔導士の女にあったんだ……そいつが買ってくれた……お前を探してたのは帰る為だ……」
「じゃあ金を渡せ！！」
「……はあ…はあ……ゃ……」
「あん？」

「……嫌だね……」

「…手前死にたいのか？」

「どうせ殺すんだろ？……ならお前何かに教えてやんないね」

「……琢磨、やれ」

俺はさっき取っておいた氷の破片を握る

「……最後に教えてやる、買った女はプレシアって言う名前だ……じゃあな……」

「じゃあな、裏切り者」

僕様ちゃんはそれをカラスの腹に突き刺し、蹴り飛ばす

カラスは吹っ飛んでいった

「……残念だったなー」

「まあ、一応ヒントは手に入れたさ」

「にしても、殺しちまったなー」

クールダウンした頭で考えてみると罪悪感が

「何だよ、俺以外は何人死のうが関係ないんじゃないのか？」

「いやー、俺人殺ししたことないからなー、少しはそういのも感じるさー」

「なら、助けに行けばいいじゃないか……即死って程の傷じゃあないだろう」
「いや、行かないよ、戦って殺す理由はあっても助ける理由はないからなー」
俺は家の方に振り返り
「ふぁ～さっさと寝よう」

おまけ

動物病院の女獣医の家

ガッシャーン

「きゃ！何？あれはカ、カラス？す、凄くでかい」
「んがっ！ぎがあ、はふは」
「怪我してる！な、治さないと」
「（なんだ、どこだ此処は……！！）」
「大丈夫…今治すから」
「（う、美しい）」

カラスと獣医の恋が始まった

カラス（後書き）

おまけ改め舞台裏
前回のあらすじ「小物臭がする」

「いや……違うんだよ」
「何が？」
「今の話って無印でしょう」
「いきなり、メタンなよ……まあ、そうだが」
「だからさ、あまり大物ぽくすると色々動かしづらいんだよ」
「それお前の事情じゃなくて書く方の事情だろうが」
「大丈夫、大丈夫ｓｔｓでは大物臭を匂わせてやるから」
「本当か？」
「ああ、アニメ板ＨＥＬＬＳＩＮＧのアンデルセン並に」
「駄目じゃあねえか、ていうか今回の話、何だこれ」
「何が？」
「何がって…途中からカラス視点だけじゃねえか」
「そして中二病ぽい」
「いやそこは問題じゃないんだよ、今問題なのはプロットが完成してない事なんだよ」
「衝撃の新事実」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2101ba/

魔法少女リリカルなのは　阿呆と泥棒猫

2012年1月6日21時49分発行